

1. 特別寄稿 花巻城本丸御殿跡の発掘調査成果

菊池 賢・室野 秀文・橋本 征也・小田嶋 千夏・高橋 純・吉田 宗平
(花巻市総合文化財センター)

はじめに

花巻城跡は、中世の稗貫氏の居城・鳥谷崎城を前身とし、天正 19 年の奥羽再仕置後、大規模な改修を経て現在の名称に改められたという。藩政時代には盛岡藩の重要な行政拠点として整備され、花巻のまちづくりの基盤として重要な役割を果たした。

花巻市教育委員会は平成 30 年から令和 5 年にかけて、考古学や城館研究の専門家で構成される花巻城跡調査保存検討委員会の指導のもと、本丸御殿跡の発掘調査を実施した。この調査では、本丸御殿の遺構が初めて確認され、城の構造や城内での活動に関する数多くの新しい知見が得られている。

花巻市総合文化財センターでは、その調査成果を広く市民に伝え、花巻城の歴史や価値への理解を深めてもらうことを目的に、令和 7 年 8 月から 10 月に企画展「花巻城展一本丸御殿跡の発掘調査成果を中心に一」を開催した。本稿は、この企画展で使用されたパネル原稿および展示資料を基に、紙上で展示内容を再構成したものである。読者の皆様には、花巻城跡の最新の発掘調査成果を通して、その歴史的意義について、共に理解を深めていただければ幸いである。

1. 花巻城の立地・地形・地質 (第 1 図)

花巻城は北上川西岸の段丘上に立地する。この段丘は西方の山地から流れ出る豊沢川、枇杷沢川、瀬川などの河川堆積物で形成された洪積世の砂礫段丘である。城の台地は南を豊沢川、北側を瀬川(後川)に限られており、北・東・南の三面は段丘崖、西方のみ平坦地が続く地形である。段丘上の標高は 82~87m、川沿いの沖積面との比高は 10~15m である。

城の北側沖積面には、旧北上川が蛇行して西へ流れ込み、瑞興寺下から本丸北面を侵食していたが、江戸時代盛岡藩の河川改修により、小舟渡の東方へ付け替えられた。現在のイギリス海岸はこれによって表出した地質である。南側は三ノ丸下から約 600m で豊沢川に至り、東側は約 200m で北上川に至る。

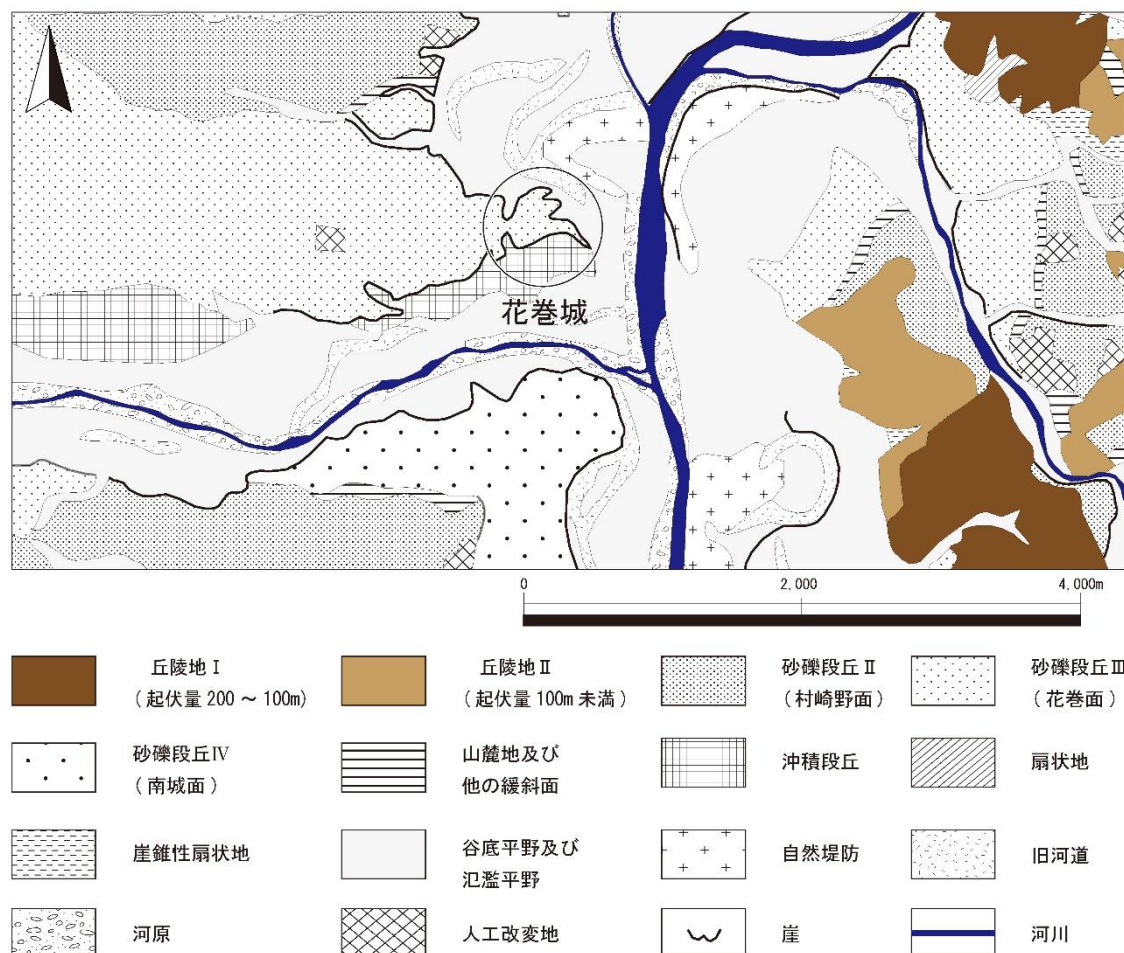
2. 築城の経過

室町時代から戦国時代、稗貫氏の本城「鳥谷崎城」が構えられていた。天正 18(1590)年、豊臣秀吉の奥羽仕置により稗貫氏・和賀氏は改易され、同年、浅野長吉(長政)が鳥谷崎に進駐し稗貫・和賀両郡の検地を実施した。翌天正 19 年の奥羽再仕置の結果、稗貫・和賀両郡は南部信直領となった。浅野長吉は嫡子浅野左京大夫(幸長)を鳥谷崎在城させ、北端の本丸から南へ二ノ丸、三ノ丸を配置して、南部氏の城代北秀愛に引渡した。この時、城の名は花

巻城に改められたとされる。

慶長3(1598)年、南部利直は北信愛(松斎)を城代とした。信愛は城と城下町の整備を進めた。慶長5(1600)年、和賀・稗貫旧臣の一揆軍の夜襲を受けたが、松斎は本丸を固守して退けた。

慶長18(1613)年、利直の次男である南部政直が花巻城代となり、翌年和賀二子城の大手門を円城寺門として移築した。



第1図 花巻城周辺 地形分類図

3. 近世以後の花巻城

元和元(1615)年、江戸幕府は武家諸法度により大名を統制し、大名の居城を原則一城としたが、広い領国をもつ盛岡藩や仙台藩、秋田藩などには例外を認めた。花巻城は盛岡城支城であり、南の防衛の要であった。また藩の穀倉地帯である稗貫郡・和賀郡の米穀収納と運上のため、二ノ丸や早坂門下に大規模な蔵を置いた。米は花巻御給人の扶持米としたほか、北上川から石巻を経て海路江戸へ運ばれ、藩財政を支えた。

本丸御殿は藩主の滞在を想定して作られており、参勤交代の際には宿泊している。

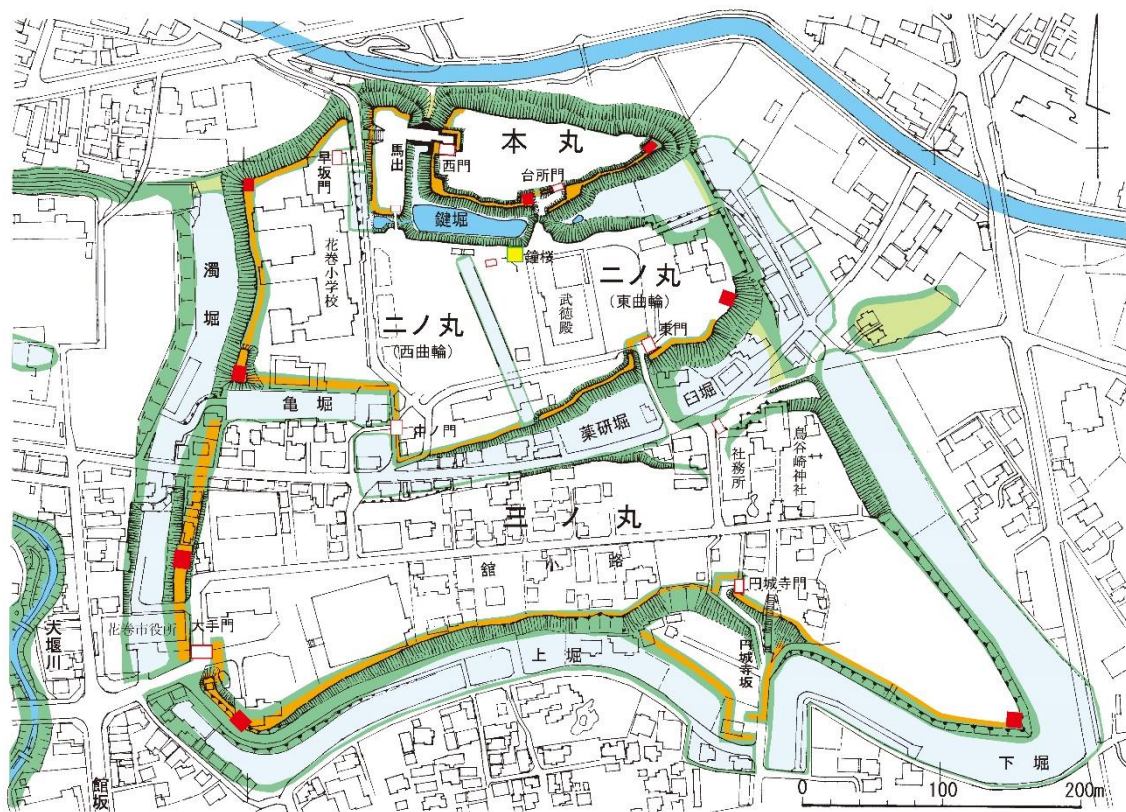
幕末から明治維新前後には盛岡藩も揺れ動き、花巻御給人から〔奮武隊〕が秋田へ出陣したが、明治元(1868)年、盛岡藩は新政府軍に降伏した。

4. 花巻城の縄張（第2図、写真1・2）

発掘調査成果から、中世稗貫氏の鳥谷崎城は、後の花巻城三ノ丸を中心に縄張されていたと考えられる。天正19(1591)年、奥羽再仕置の時、城構えが大幅に改められ、本丸を台地の北端に配置し、南へ二ノ丸、三ノ丸を梯郭式に配置した。

本丸は深い堀で独立し、西側を正門として、堀の対岸に馬出が構えられている。馬出と本丸は石垣の土橋で結ばれ、西門の枡形も石垣を備えている。南側の御台所前御門も石垣と櫓台を備えた枡形門である。東側先端には菱御櫓が構えられていた。

二ノ丸、三ノ丸の西側には巨大な濁御堀によって西側台地と切り離されている。この堀の南端部、三ノ丸西側が大手門である。搦手門は三ノ丸南の円城寺門であるが、坂の下には外側へ張り出した喰違虎口（くいちがい こぐち）の枡形が構えられる。



第2図 花巻城縄張復元図

作図 室野 秀文



写真1 本丸と馬出を結ぶ土橋南側法面の石垣



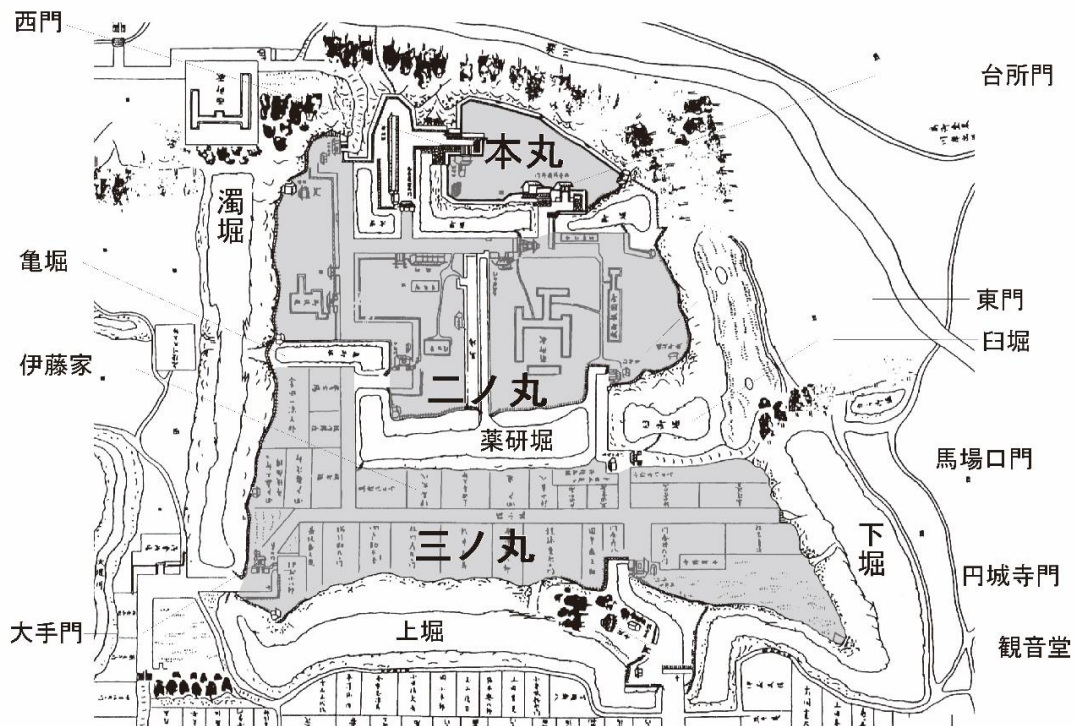
写真2 巨大な濁御堀（南から）

5. 花巻城内の主な施設（第3図、写真3）

江戸時代後期の『花巻御城廓図』によれば、城内には様々な施設があった。

建築工事によるものとして、曲輪の入口に置かれた〔門〕や外周要所の〔櫓〕、また内部の主な建物として〔本丸御殿〕、〔二ノ丸の御役屋〕・〔南御蔵〕、〔三ノ丸の武家屋敷群〕などがある。このうち現存する建物としては、三ノ丸搦手口にある〔円城寺門〕や武家屋敷の〔伊藤家住宅〕、三嶽神社の拝殿として移築された旧観音寺の〔観音堂〕などがある。

土木工事によるものとして、城内の主要部を囲む〔堀〕や〔土塁〕、曲輪間をつなぐ〔土橋〕、本丸周辺の一部に〔石垣〕があり、現在もその多くを見ることができる。



第3図 『花巻御城廓図』（もりおか歴史文化館収蔵に加筆）



写真3 花巻城の建築遺構（左：円城寺門、中央：城内伊藤家住宅、右：旧観音寺観音堂〔三嶽神社拝殿〕）

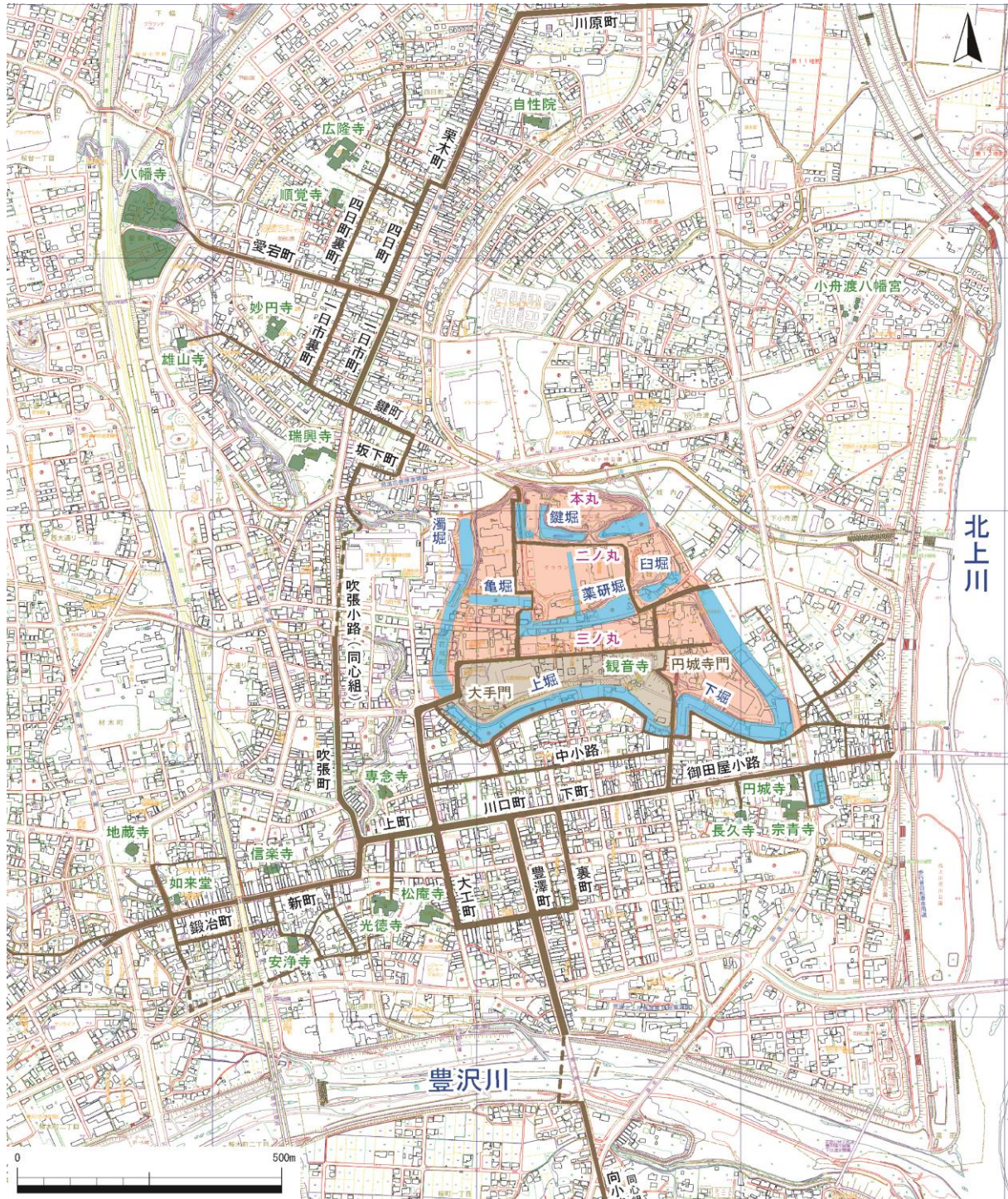
6. 花巻城と城下町（第4図）

花巻の城下町は、城の西方を縦貫する奥州道中沿いやその周辺に町場や寺社が計画的に置かれる構造で、その広がり東西約1.4km・南北2.6kmに及んでいる。

花巻城は段丘東端の高台上にあり、北～東側の崖下を北上川(瀬川)、南方を豊沢川によっ

てそれぞれ周囲と大きく分けられる。この2つの河川は城下町のほぼ東限・南限となり、主な町場は段丘下の北側と南側に広がる平地部の道中沿いに形成された。

城北側には「四日町」・「一日市町」、城南側に「川口町(現在の町周辺)」が城の整備期と重なる文禄～慶長年間(16世紀末～17世紀初め)に開かれた。これらの町場は、「花巻三町」と呼ばれ繁栄し、現在の市街地形成の出発点となっている。



第4図 花巻城と周辺の町割り

7. 本丸の規模と施設

最北に位置する本丸は、北～東側を北上川の旧流路である瀬川（現在の後川）によって区切られた標高約 85m の段丘北東縁に築かれた主要な曲輪で、規模は東西約 162m、南北約 62m に及ぶ。『花巻御城廓図』によれば、外周の大部分に塀が巡り、南東辺のみが柵列で区画される。西辺中央には正門の西御門、南辺中央には御台所前御門が石垣で固められた内枳形とともに構築される。また、東端には菱御櫓が築かれる。

本丸内部には、大型建物の本丸御殿があり、南西隅には領内の祈願所として城内三社が祀られる。本丸御殿は、藩主や城主の御座所であり、絵図には描かれていない。

8. 本丸に関する歴史的背景

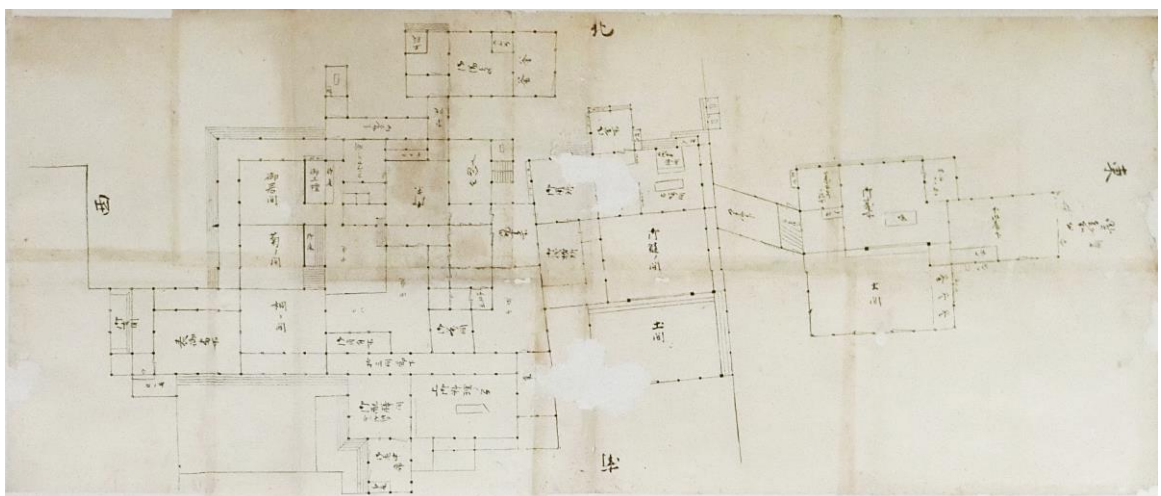
天正 19(1591)年の奥羽再仕置で九戸城が落城すると、再仕置軍は帰路に鳥谷崎城を改築したとされる。これを機に、城は南部氏の支配拠点の近世城郭へ姿を変えた。

松井道圓の『和賀稗貫郷村志』（享保 11 年）には、天正 19 年の北秀愛入城時に、本丸にあった瑞興寺を現在地へ移したとの伝承がある。瑞興寺の跡地には新たな建物が建築されたと考えられよう。また、横川良助がまとめた『内史略』（天保年間以降の成立）には、慶長 14(1609)年に北松斎が「屋形」を普請したと記され、この際にも本丸で建築が行われた可能性がある。さらに、文化 6(1809)年には本丸御殿の修理記録があり、この御殿は明治 6(1873)年の解体まで存続していた建物と考えられる。

9. 花巻城本丸御殿の絵図面（第 5 図）

江戸時代の花巻城に関する絵図面は、約 10 枚現存する。多くは江戸時代後期以降に作成されたものである。これらは、二ノ丸や三ノ丸の建物配置や土地利用の様子を詳細に示す一方、重要機密の本丸御殿は、意図的に描かれていない場合がある。

本丸御殿に関連する絵図は間取図のみで、中村隼人氏はこれを 3 つのタイプに分類した（中村、2020 年）。その一つで花巻御給人の松川家に伝わる絵図には建物の東西軸に屈曲



第 5 図「本丸御殿図」（松川家資料、花巻市博物館寄託）

が見られ、屈曲部を境に建物の新旧が存在した可能性が推測される。この間取配置は、発掘調査で特定された本丸御殿の遺構分布と一致することが確認された。

10. 建物の基礎―「坪地業」(写真4・5)

本丸御殿の柱は礎石の上に建てられている。現在地表に露出する数か所を除き、ほとんどの礎石は抜き取られていて、発掘調査で確認されたのは、礎石を据え付けるための〔坪地業〕である。

坪地業とは、礎石よりも一回り大きく地面に穴を掘りくぼめて、中に粘土や礫を充填し、礎石の基礎としたものである。これは地震や大雨の際に礎石が傾いたりすることを防止するための工法である。

現在残る礎石や、坪地業の並びや拵りから、建物の平面規模や間取りが復元され、本丸御殿の絵図と照合して、本丸御殿の各建物が特定された。



写真4 本丸御殿の坪地業（穴の内部に礫を充填している。右は礎石が残っていた例。）

11. 新



写真5 本丸御殿の坪地業（左：御殿北西部での分布状況、右：新旧の坪地業が重複している例）

旧の御殿建築（第6図）

調査で明らかになった本丸御殿は、西側建物と東側建物で棟方向が異なり、建築時期の違いが想定される。これらの建物は松川家伝来の絵図に表現されており、明治4(1871)年廃城時まで存在した建物群と考えられる。

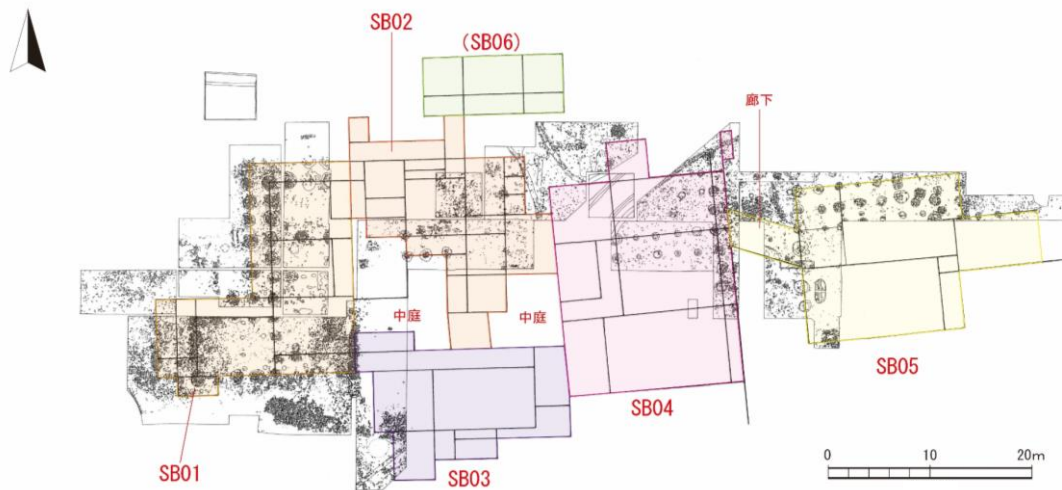
西方の御居間・菊ノ間・桐ノ間・表御番所(SB01)、御廊下・クラカリノ間・御末・御納戸・御物書所・休息ノ間・御茶ノ間(SB02)、御目付所・拾三間廊下・上御料理ノ間・御配膳ノ間・御老中席(SB03)が正方位であるのに対し、東側の御用所・御金所・御代官溜ノ間・御鍵ノ間・土間

(SB04)、御廊下・御臺所奉御役所・御臺所・土間・下廊下(SB05)は、やや西偏した棟方向で、南側の御台所門枳形の方位に近い。また、以上の建物に先行する坪地業も多く確認されており、御殿に変遷があったことがわかる。

12. 本丸御殿の規模（第6・7図）

発掘調査により、本丸御殿の最終形態は松川家に伝わる本丸御殿図面の間取であったことが判明した。その規模は東西約87m、南北約43mと推定される。松川家の図面では、東端には未発掘の味噌蔵が連続しており、実際の規模はさらに長かった可能性がある。

本丸内の建物配置を見ると、西御門から入ると広場がある。この広場は南北約55m、東西約30mの規模で、有事の際に城兵を待機させる空間であるとともに、本丸御殿の格式を示す役割があった。また、御殿は本丸敷地を最大限に活用し、藩主の滞在空間と行政区画が効率的に配置されている。



第6図 本丸御殿 建物配置図



第7図 本丸御殿位置図

13. 厚い整地層 (写真6・第8図)

本丸御殿の地下には、次の写真のように、厚い整地層が存在していることが判明した。本丸御殿の遺構構築面から深掘り調査を行った結果、厚さ 55～130 cm に及ぶ人工的な整地層が確認された。

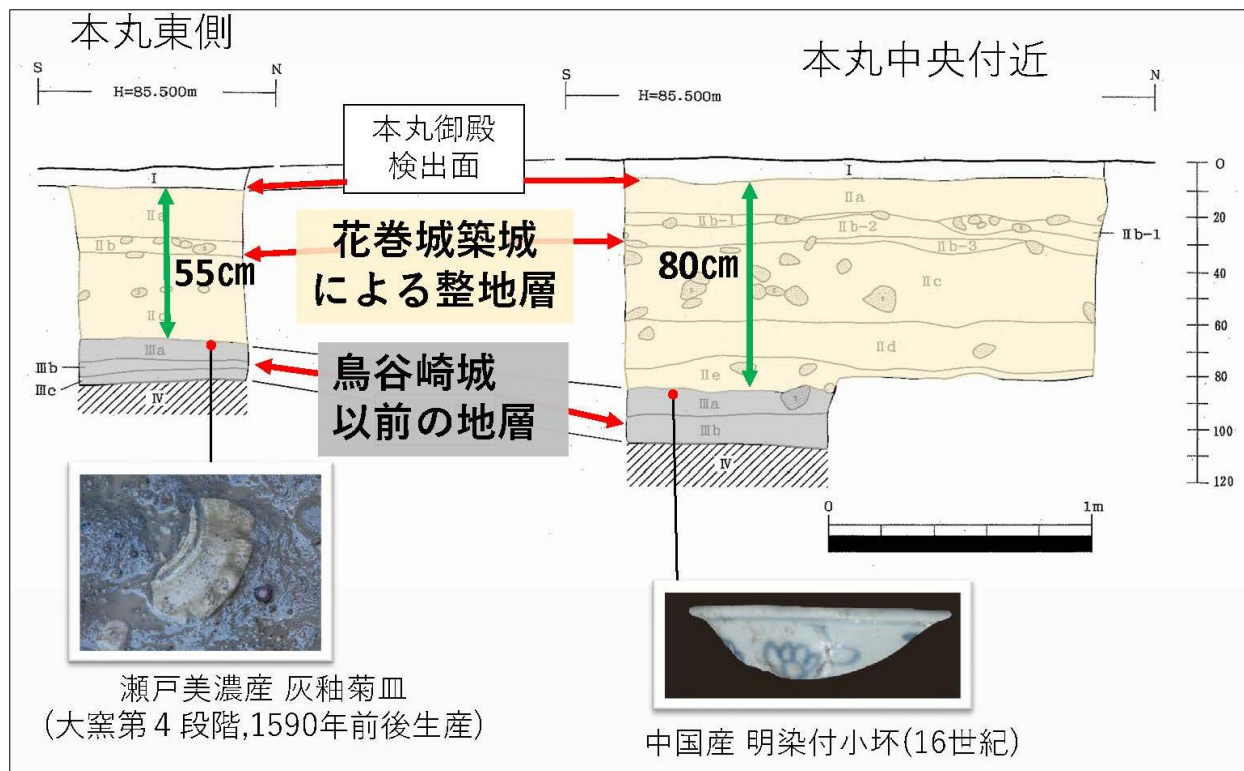
この整地が行われた時期は、深掘り下部から出土した遺物により、花巻城が築かれた 16 世紀末以降と特定されている。

整地層には砂礫土が多く含まれており、その土砂は本丸外周の堀を掘削した際に発生したものと考えられる。つまり、堀の掘削と本丸の整地は、同時に行われた一連の土木工事の一部であったと言える。

こうして、花巻城はそれ以前に存在した鳥谷崎城を大規模な土木工事によって改修し築城されたのである。



写真6 本丸御殿地下の厚い整地層 (左：平成 30 年度 本丸東側、右：令和元年度 本丸中央付近)



第8図 本丸整地層断面図と出土遺物

14. 整地層に設けられた段差（写真7）

前述のとおり、花巻城本丸は、鳥谷崎城時代の表土層上に厚い盛土を行い整地されていることが調査で明らかとなった。

整地層の厚さは、本丸西側から東側にかけて徐々に増しており、旧地形の東側への緩やかな傾斜に合わせて水平に整地されたと考えられるが、整地層全体が水平ではなく、東側の台所施設があるエリアと、西側の藩主御成の間など主要建物が集まるエリアとの間に約40cmの高低差があり、西側が高いことが確認された。

この高低差に機能的な意図があったのか明確ではないが、格式の高い藩主滞在施設を上位に置き、作業空間である台所施設を下位に配置することで、役割の違いを視覚的に明確に示した可能性も考えられる。



写真7 本丸中央付近で確認された高低差
(北から撮影。東側が約40cm低く、明瞭な段差がある。)

15. 水勾配の工夫（写真8）

本丸御殿外周部では、整地層に緩やかな傾斜が2棟の建物跡から認められた。これは、雨水などの排水を促す水勾配とみられる。御殿建物部分を高く整地し、屋根からの雨水や雪解け水などを建物外周の低い場所へ流す工夫である。

水勾配が適切に設けられていない場合、建物基礎部分への雨水の浸透や溜まり水による構造物の劣化や、蚊などの害虫の発生源となる可能性もあり、健康面に対しても悪影響を及ぼしかねない。

このように、水勾配の設計と整地の工夫は、城郭における建築物の保存性や居住性を確保するうえで、非常に重要な要素であったことがうかがえる。



写真8 降雨後に水が溜まった状況
(右側は本丸御殿の外側で低いため、水が溜まっている)

16. 出土遺物【陶磁器】（写真9）

出土陶磁器の主体は花巻城時代の近世陶磁器である。中でも肥前産の陶磁器が多く出土している。また、19世紀以降の窯跡を特定できない「在地産」の陶磁器も一定量出土した。これらの中には、地元花巻産の鍛冶町焼や花巻焼が含まれる可能性があるものの、確定できていない。

出土状況としては、旧表土層が残存していた御殿東側一帯での出土が多い。ここは台所施設にあたるため、食器類が保管されていて、遺物の出土量が多くなったとも考えられる。

その他、花巻城築城期や鳥谷崎城時代に遡る遺物も出土している。また、平安時代や室町時代の遺物もあり、当時の有力者の居住を示唆している。

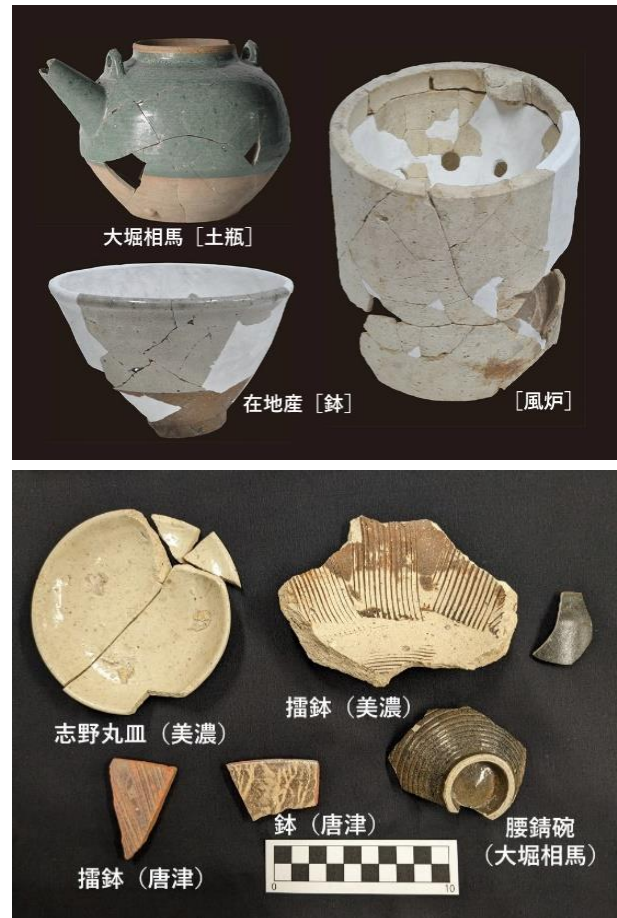


写真9 本丸跡出土陶磁器（左：磁器、右上：陶器、右下：陶器）

17. 出土遺物【瓦】(写真10)

本瓦葺きの屋根瓦破片が、本丸御殿跡の全域より一定数出土している。全て灰色ないし黒褐色の「燻瓦（いぶしがわら）」である。種類は、軒丸瓦・軒平瓦、丸瓦・平瓦、棟込瓦がある。

注目されるのは、南部家の家紋である向鶴文の瓦当文様をもつ軒丸瓦点が本丸で初めて出土したことである。盛岡城跡の分類編年では「筆羽双鶴文」と呼ばれるもので、17世紀中葉～後葉に製作されたものとみられる。

出土した瓦は全て破片であり、出土量も限られることから、瓦の大半は明治初めの廃城後、建物取壊しの際に廃棄・撤去され、一部がその後の堆積土中に混入したとみられる。なお、瓦葺きであった建物の場所や範囲については不明である。



写真10 本丸跡出土向鶴文軒丸瓦（瓦当）

18. 出土遺物【和釘】

和釘は、日本で古くから用いられてきた手打ちの釘であり、加熱と鍛錬により酸化被膜が形成されることで、腐食に強いという特徴を持つ。

今回出土した和釘には、曲がりや折れが多く見られ、これは明治5（1872）年の廃城および翌年の本丸・二ノ丸建物の払い下げに伴う解体作業に起因するものと考えられる。建物の解体に際し、柱や梁を接合していた和釘が引き抜かれ、その場で廃棄されたと推察される。城が存続していた時期にも釘の廃棄はあったと考えられるが、その際には適切に処理されていたとみられ、大量に散乱する状況は想定しにくい。よって、今回の出土は廃城に伴う廃棄によるものであると考えられる。

19. 出土遺物【古銭】（第9図）

古銭は 65 点出土している。内容としては中世に流通した北宋銭4点、明銭 25 点がある。そのほかに江戸時代の鑄造銭は 19 点、無文銭などは 17 点ある。無文銭には、鑄写しを繰り返したことで小さくなった輪銭も含まれる。

中世に流通した古銭には大きさ・重さ・穴の形が不十分のものが多くほとんどは、元の銭を模して造られた、いわゆる「模鑄銭」「鋳銭」であると考えられる。以下、代表的な出土古銭について、概要を記した。

洪武通寶

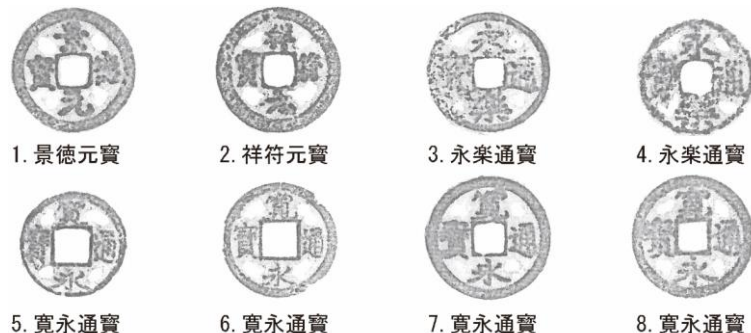
中国明代の洪武年間に、太祖洪武帝(朱元璋)によって、発行された銅銭。室町時代に日本にも多く輸入され、永楽通寶とともに利用された。室町末期に渡来銭の模鑄が各地で行われ、洪武通寶の模鑄は大隅国の加治木銭が有名である。

永楽通寶

中国明代の永楽年間に、成祖永楽帝(朱棣)により発行された銅銭。室町時代に日本に多く輸出された。良質で、室町時代は標準的貨幣となった。慶長 9(1604)年に定められた鋳銭との交換の比率を巡って、紛争が続発。慶長 13(1608)年頃、使用が禁止された。

寛永通寶

江戸時代の寛永 13(1636)年以降、江戸幕府が全国各地に設けた銭座に請負わせて発行した銭貨。素材は、銅・鉄・真鍮などで、一文銭と四文銭があった。大量に鑄造されて全国に流通したため、永楽通寶に代わる江戸時代の代表的かつ統一的な銭貨となった。



第9図 本丸出土古銭拓本（一部）

20. 出土遺物【煙管（きせる）】（写真 11）

煙管は、「羅宇煙管（らう きせる）」と呼ばれるものが出土した。これは、金属製の雁首と吸口を竹などの羅宇でつないだものである。御殿内から煙管が出土した事実は、御給人や使用人らが喫煙の習慣を有していたことを示唆している。

現在の花巻市の一部である大迫地域では、17 世紀初頭に葉たばこの栽培が始まり、18 世紀初頭には盛岡藩主への献上品とされた記録も残る。大迫産の葉たばこは江戸や他領にも移出され、他領産と区別するために「南部葉」と称された。

このように、各地で高い評価を得ていた南部葉は、花巻城内においても御給人や使用人らに好まれ、喫煙されていた可能性がある。



写真 11 煙管の各部位名称（参考品、南部たばこ史料館蔵）

21. 出土遺物【魚骨・貝類・獣骨】

魚骨・貝類・獣骨が出土した例は、花巻城本丸跡の発掘調査では、令和 5 年度が初めてである。本丸御殿の御台所跡の坪地業や、その周辺から出土した。

同定できた資料に、魚骨はサケ類・マダイ・フサカサゴ科・カレイ科などがある。貝類にはエゾアワビ・アカガイ・ハマグリ・ウバガイなどがあり、いずれも海産が主で、大型の個体が目立つ。鳥骨はキジ・ヒシクイなど食用に供するものが多く、これらは食料残滓と考えられる。

ネコの骨はイエネコのもので一頭である。出土状況からみて埋葬等はされていないと考えられる。御台所跡で出土したため、鼠害防止の目的で飼育されていた可能性もある。

おわりに

以上のように、5 年間にわたる本丸御殿の発掘調査により、建物の規模、変遷、構造に関する貴重な情報が得られた。ただし、未調査部分が多く、その全体像を解明するにはさらなる調査が必要である。

また、本丸御殿に関する情報が一定程度蓄積されたものの、本丸外周部の遺構については残存状況など不明な点が多く、その実態も明らかにする必要がある。この課題に対応するため、令和 7 年度から本丸外周部の発掘調査を開始した。同年度には台所門跡と枳形部分の調査を実施し、枳形内に構築された野面積の石垣や台所門基礎の遺構が検出されている。外周部の調査は令和 8 年度まで継続する予定であり、これにより本丸御殿の調査内容と併せて、考古学的情報のさらなる充実を図る計画である。

※本稿の各章の執筆者は次のとおりである。

菊池（はじめに・8・9・12・13・16・おわりに）、室野（1・2・3・4・10・11）

橋本（5・6・7・17、）小田嶋（19・21）、高橋（14・15）、吉田（18・20）

《参考文献》

花巻市教育委員会

『平成 30 年度～令和 5 年度調査 花巻城本丸跡発掘調査報告書 本丸御殿編』2025 年

村田 淳・中村隼人・高橋静歩「花巻城の研究－三之丸における遺構・遺物の検討－」
『花巻市博物館研究紀要 第 14 号』2019 年

村田 淳「花巻城出土の陶磁器類－花巻城期における出土傾向の分析－」
『花巻市博物館研究紀要 第 15 号』2020 年

村田 淳「花巻城出土の陶磁器類(2)－花巻城改修以前における出土傾向の分析－」
『花巻市博物館研究紀要 第 16 号』2021 年

中村隼人「花巻城本丸御殿の建築空間(1)」『花巻市博物館研究紀要 第 15 号』2020 年

中村隼人「花巻城本丸御殿の建築空間(2)」『花巻市博物館研究紀要 第 16 号』2021 年

菊池 賢「花巻城跡」『北日本における近世城郭研究報告資料集』
日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会

菊池 賢「花巻城の様相」
『岩手考古学会第 54 回研究大会資料集 中近世城郭等の石垣利用と石材』2023 年